悠久の京を訪ねて Part Ⅵ Vol.4

KYOTO ARCHAEOLOGY CENTER

京は古(いにしえ)より人々が集い、その気候・風土の中、人々の生活が営まれてきました。
京都府内の遺跡で多数発掘された出土品により、縄文・弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。
私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。
Part Ⅵでは京都府内で見つかった、ものづくりに関する遺跡を紹介します。

2,000年前の玉作り工房

■宝石へのあこがれ

私たちが身を飾るイヤリングや指輪、ネックレスなどにはさまざまな宝石が使われています。縄文時代から古墳時代の人々も、翡翠(ひすい)や碧玉(へきぎょく)、水晶などの宝石を加工して、身につけたり祀(まつ)りに使用したりして愛用していました。

発掘調査ではさまざまな宝石を加工した勾玉(まがたま)や管玉などの玉類が出土しますが、製作方法がわかることは稀です。京丹後市奈具(なぐ)・奈具岡遺跡群では今から約2,300～2,000年前の弥生時代中期の玉作り工房群が見つかり、独自の製作工程が明らかになりました。

■丹後地域の特産品

奈具・奈具岡遺跡群は丹後半島を貫流する竹野川右岸の丘陵上にあり、平成4、7、8年の発掘調査で、ムラの東端の2つの丘陵斜面を中心に総数96棟におよぶ玉作り工房の建物が見つかりました。工房は東西2地点からなり、中期の中頃に碧玉に似た緑色凝灰岩(りょくしょくぎょうかいがん)を材料とした工房群が営まれ、100年ほど遅れて水晶を材料とする工房群が誕生します。緑色凝灰岩の工房からは多量の原石や管玉の未製品のほか、玉類に穴をあけるための瑪瑙(めのう)製の工具や各種の砥石などが出土し、製作工程を復元することができました。また、水晶の工房で出土した水晶製玉類の未製品から、独自の製作技法の存在が明らかになりました。多数の鉄素材やガラス玉の未製品も出土しており、玉作りに必要な鉄製工具やガラス製品の再加工も行っていたようです。これらの出土品は国の重要文化財に指定されています。

丘陵斜面の玉作り工房

奈具・奈具岡遺跡群と同一の技法で製作した水晶製小玉は、弥生時代後期初めの京丹後市三坂神社墳墓群のほか、奈良県田原本町唐古・鍵遺跡や香川県高松市太田原高洲遺跡、長野県岡谷市天王垣外(てんのうがいと)遺跡などでも見つかっています。これらの製品は、丹後の工房で生産された可能性が高く、他地域へ交易品として流通していたと思われます。

水晶製の玉類

協力：公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　企画・制作：京都新聞COM